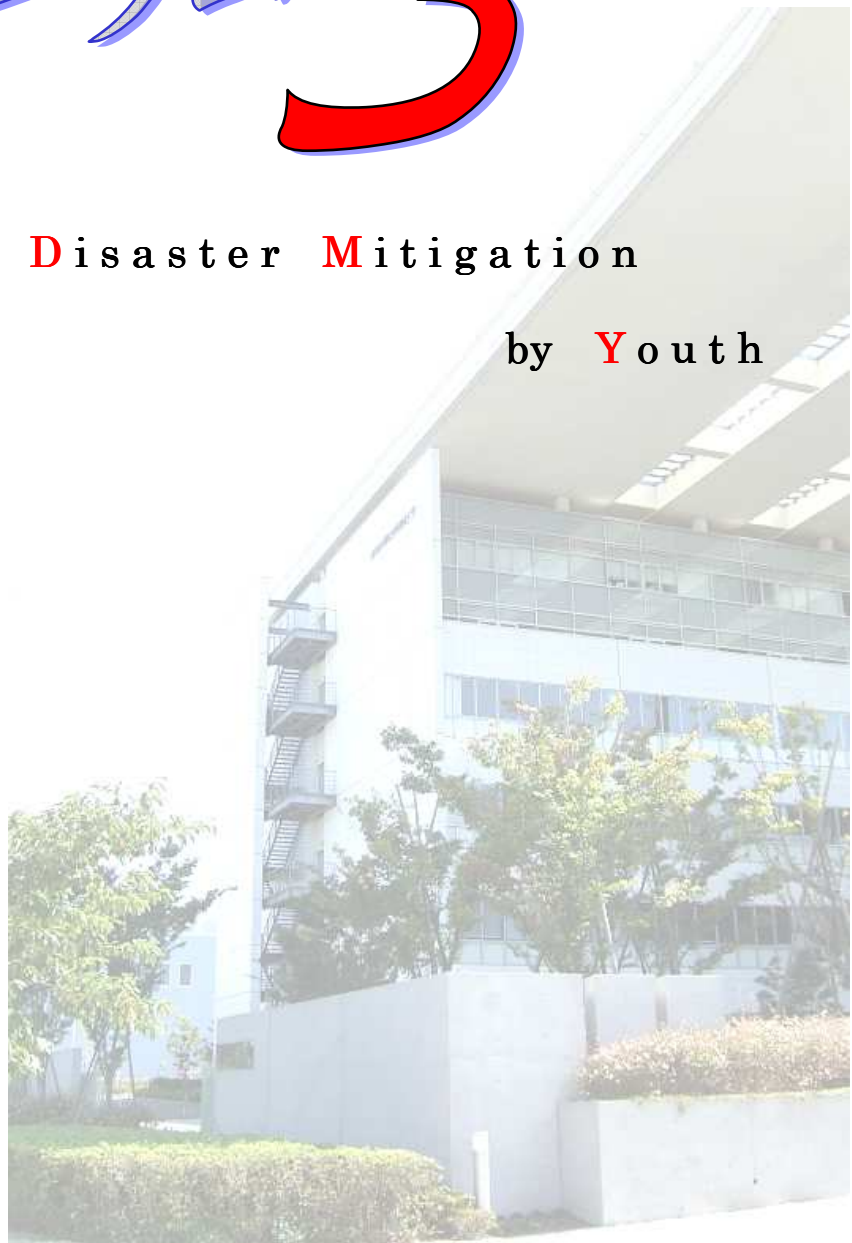


# 防災ユース フォーラム 3

Japan **F**orum for **D**isaster **M**itigation

by **Y**outh

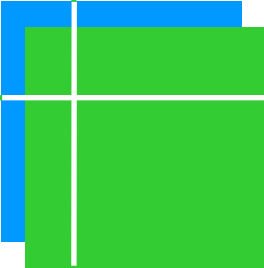


# I N D E X

## C O N T E N T S

---

はじめに / 概要	1
フォーラム運営の動き	2
アイスブレイク	3
団体・個人紹介	4
参加団体の日本地図	5
セッション1 ～病院における防災について～	6
セッション2 ～高齢者・障害者疑似体験～	7
セッション3 ～台風災害における高齢者の現状～	8
全体総括 フォーラムの成果	9 – 10



# はじめに ～報告書作成に当たって～

2005年9月17日、18日と2日間にわたって開催された第三回防災ユースフォーラムは参加して頂いたユースをはじめ、多くの方々や施設・機関・団体のご協力により、無事に終了することが出来ました。本当にありがとうございました。

昨年度は世様を決める漢字が「災」となる程、日本の各地で多くの災害が起きました。その中で、特に叫ばれたのが災害時要援護者の問題でした。災害時要援護者の中には福祉的な支援を必要としている人が多くいらっしゃいます。この災害時要援護者の問題は防災を進めていく上で欠かせないものとなってきています。今回のテーマを「福祉と防災」としたのはそのためです。

今回の防災ユースフォーラムは一回で終わるものですが、災害は今後も必ず起きます。このフォーラムをきっかけに、今後、更に福祉と防災が協力・連携し、よりよい支援が展開できることを願っています。

第三回防災ユースフォーラム実行委員長 加納佑一

## フォーラム概要

日 程：2006年9月17日（土）～18日（日）

場 所：神奈川県立保健福祉大学

観音崎青少年の村

参加者数：26人

## 実行委員体制結成まで

名古屋で始まった防災ユースフォーラムは、開催3回目でもあり団体としても大きな転換期を迎えていた時期でもありました。開催を重ねるごとにユースが抱いた「防災ユースフォーラム」への疑問や漠然としていた大きなイメージが具現化してきたことで、より質の高い体制づくりが求められ、それに応じることを求められていました。また、回を追う毎に関わるメンバーも増え新規団体の参加も見られ、実質的な成果が見られる兆しが出てきていました。そのような状況を踏まえ、今までの事務局体制では受け皿としての機能が十分に賄い切れないことに着目し、前回よりも機能分業化することで、事務局に加えて実行委員会を設置して権限委譲してのフォーラム開催という背景が出来上がったのです。そのような土壌が試される意義も少なからず含んではいたものの、少数を主軸とした「第3回防災ユースフォーラム実行委員会」が形成されました。

当日までの運営の指揮に、実行委員長加納佑一、プログラムの構成等を担当する企画部に酒井和輝、全般の広報を行う広報部に千葉崇博と分かれて業務分掌することとして当日までこの体制で企画から報告まで臨むことになった。

## 実行委員会の動き

実行委員会の役割はフォーラムの執行と運営でした。そのためフォーラム実施に関する事務を優先的に担わなくてはならない状況が生まれ、プログラム等の進行においては実行委員会では携わることは出来ませんでした。

そのため共催という形で、外部団体である横須賀のTHADに協力を求め実行委員会との2本柱で動き、純粋なフォーラムの総務作業の部分を実行委員会が担うことができました。

前回と大きく異なった点は中心のメンバーが固定化されつつも、密に協力団体と連絡が取りやすかった点に尽きません。しかし、その反面学生故の油断から議事進行を予定していた分よりも思うように進められきれてなかった部分は反省すべき点であります。

## 主なスケジュール

- ▼4月24日・・・立教大学ボランティアセンターにて組織体制構築
  - △第2回における運営体制の評価及び新しい組織作り(第3回に向けて・・・)。立教大学ボランティアセンターの一角をお借りして、新組織体制の整備・方針の裁定。
- ▼6月19日・・・明治学院大学にてソニーマーケティング報告会
  - △第2回フォーラム運営の大枠をまかなったソニーマーケティング助成への報告会にその時の参加した団体メンバーが報告。
- ▼6月20日・・・スタバで倉田とその後、耐震補強フォーラムで
  - △フォーラム全体の統一テーマの裁定及びセッションの暫定案を打ち出し、その複数案のエディット(手直し&抽出)作業。
- ▼7月19日・・・かながわ県民活動サポートセンターにてフォーラム方針検討
  - △当日までの実行委員会としての事務作業の動きの方針決め。さらにはスケジュールを大まかに定めた。ご意見番に岩崎氏を迎え意見を交わして詳細な内容を固めた。
- ▼9月7日・・・かながわ県民活動サポートセンターにて中間業務検討
  - △当日までの実施に当たる部分での事務作業の見直し。引き続き広報業務の継続。スタッフの役割と業務の明確化を行う。
- ▼9月11日・・・かながわ県民活動サポートセンターにて開催までの準備
  - △参加者に配布する最終版のプログラムの作成に着手。また、応募のあった参加者に対して当日までは実行委員会からEメールにて状況報告。

## 目的

防災ユースフォーラムも3回目となり、新旧参加者が相混じる状況となってきた。しかし、知り合い同士での集りや、緊張して積極的にセッションに参加できなくなってしまうのは、本来のフォーラムのねらいが達成されないままになってしまう。アイスブレイクでは、これまでの参加回数にかかわらず、顔見知りとなり、新たな繋がりを形成するきっかけ作りをしました。

「私は誰でしょう？」では自己紹介を気軽に行い新たな知り合いの発掘の時間とし、「震災シミュレーションゲーム」ではペアやグループ内での会話を促すことで、新たなつながりを深める時間としました。

## 内容

### 『私はだれでしょう？』 担当：千葉崇博（個人）



誰も見ず知らずの人間が集まった場の中では、中々思うように打ち解けづらいものがある。まずは、誰もが自然に挨拶ができる雰囲気作りを司会役は果たさないといけないのであろう。『私は誰でしょう？』では、そんな初対面の人に積極的に声を何回かかけさせることを余儀なくさせられるゲームである。情報収集をする過程の中で色々な人と接する場面は自然と相手との緊張も打ち解けているだろう。

### 『震災シミュレーションゲーム』 担当：西村 健（震災ガーディアンズ）（個人）



名古屋大学「震災ガーディアンズ」の開発によるボードゲームです。防災教育分野において一般への意識啓発を目的として、地震発生の前後を擬似的に体験できます。対象年齢は小学生から大人まで。開発したゲームは、地震発生前、地震発生直後、避難所生活とそれぞれの時期に分けて用意してあります。

## 評価

初めて顔を合わせる人達が集まる中で進められるこのフォーラムにおいて、「緊張感のほぐし」というのは重要な意味を持ってきます。そういうことでは、今回のアイスブレイクは成功だったと言えると思います。「私はだれでしょう？」では、参加者から、ゲームを通し新顔の方とあいさつできる雰囲気、話し掛けられる雰囲気を創れたとの感想を多くの方から伺いました。さらに、「震災シミュレーションゲーム」では、「防災」のフォーラムらしさを参加者に意識付けられたと感じました。

反省点は、説明不足による二度手間や大幅な時間超過が目立ってしまったことです。また、フォーラム全体の時間配分からすると自己紹介に多くを割く事は出来ないが、アイスブレイクに割く時間が少なかったように感じました。メインではなかったにしろ、新しい参加者が多い場合にはもう少しゆとりを持って臨めるようにしたいと感じました。

3 日間 参加メンバー	
氏名	所属団体
横幕 早季	静岡大学学生防災ネットワーク
小原 香美	静岡大学学生防災ネットワーク
清水 麻衣	静岡大学学生防災ネットワーク
置村 悠一郎	学生NPO 南海地震学生防災ネットワーク
檜田 史彦	学生NPO 南海地震学生防災ネットワーク
出原 敬介	学生NPO 南海地震学生防災ネットワーク
西尾 千絵	震災ガーディアンズ
西村 健	震災ガーディアンズ
加納 佑一	THAD、防ギャザ、ホッとするクラブ
河部 侑平	神奈川大学法学部自治行政学科
河田 彩	明治学院大学ボランティアセンター
倉田 和己	名大環境学研究科 都市環境学専攻 福和研M2

3 日間 変則参加メンバー	
氏名	所属団体
栗山 光次	県立元石川高校2年防災ギャザリング日本防災士会
千葉 崇博	DIG 公式指導員/DIP

2 日間 参加メンバー	
氏名	所属団体
青山 響	ボーイスカウト甲府第2団(清水第17団)
八田原 納苗	学生NPO 南海地震学生防災ネットワーク
酒井 和輝	まっちワークグループ早稲田
渡辺 善明	横須賀市立市民活動サポートセンター/DIP
岩崎 広志	防災ユースフォーラム事務局長

1 日間 参加メンバー	
氏名	所属団体
鈴木 香里	神奈川県立保健福祉大学看護学科
横山 北斗	ChildWish
杉山 恵望	湘南工科大学
佐藤 百恵	富士常葉大学災害ボランティアサークルハルジオン
伊藤 英司	本田消防少年団
高橋 郁美	THAD
飛塚 通子	THAD
浜中 綾美	THAD

参加団体の日本地図



SL 学生ネット



本田消防少年団



まっちワーク G 早稲田



SNDR



静岡大学学生防災ネット



THAD



防災ギャザリング



震災ガーディアンズ



ハルジオン



名古屋大学福和研究室



ボーイスカウト甲府  
第二団清水第17団



Child Wish



明治学院大学 VC

## 病院における防災について

Child Wish

### 内 容

阪神大震災時に病院で起こったこと。そこからわかる病院防災の問題点、その問題点に対して、どのような対策が取られたか（行政、病院等）、またそれらを踏まえた現在の病院防災です。

### 工 夫

これらの流れを（時系列で）踏むことで、震災時と現在の比較、そして、問題点に対してどのような対策が講じられたかをわかりやすく述べられるよう工夫しました。

### 伝えたかったこと

参加者のみなさんには、病院防災が阪神大震災を機にどのように変化し、そして現状を「知ってもらう」、「考える」機会を持っていただきたい、持っていただけるようにと思い発表しました。

### 発表の感想

みなさんよく質問してくださったので、関心を持っていただけたのではと思います。しかし私も準備不足で質問に対して返答できなかったことが多々あり、また専門用語が多数出ていたので、それをみなさんにわかりやすく伝えられたかという、そこは疑問です。発表をしてみて、逆に自分の方がいろいろと勉強をさせていただきました。いろいろな場面で防災に関わっているみなさんが、それぞれの視点で投げかける病院防災への疑問や、質問はとても新鮮で勉強になりました。全体として、病院防災について考えていただく「きっかけづくり」が出来たという意味ではとても良い時間になったと思います。



## 高齢者・障害者疑似体験

THAD

## 内 容

高齢者や障害者の体験が出来る器具を使って、実際に彼らが生活するうえでどのような困難があるのかを体験的に学ぶ企画です。大学の校内や校外を歩いてみたり、器具をつけて食事をしたりしました。

## 工 夫

バリアフリーの場所とそうでない場所での違いを体感してもらうために、大学外にも出られるようにしました。また、生活ということに着目して、普段の講義でも行わない、体験器具をつけての食事や買い物などもプログラムに組み込みました。

## 伝えたかったこと

災害がおこると多くの人々が被災者となって困難な生活を強いられます。しかし、日ごろ福祉的なサービスを必要としている人たちは、さらに困難な生活をするようになります。例えば、避難所などでもバリアフリーになっていないところが多く、生活が出来ないため、災害後も壊れた自宅で生活する方もいるようです。このように、日ごろからの福祉的な配慮が災害時には特に重要であるということを経験的に理解することを目的としました。

## 発表の感想

初めて体験器具をつけたユースや、体験したのがかなり昔のユースなどが多く、かなりの人が関心をもっていただけたと思います。さらに、普段は大学の演習などでも行えないような「外出」や「食事」などを体験する事が出来ました。そういった日常生活を知ることが、災害後の生活支援と深く結びついているということを感じていただけたのではないかと思います。ただ、体験器具をつけるときの説明の体制がイマイチ整っていなかったことは今回の反省点だと思います。また、日常のみでなく、災害時を少し想定した疑似体験プログラムを行うと更に理解が深まると感じました。



## 台風災害・高齢者の現状

THAD

### 内 容

2004年は多くの台風災害が発生しました。その時に亡くなられた方の多くは65歳以上の高齢者です。それらの現状や、死亡した理由、先進的な避難の取り組み事例などの発表をしました。

### 工 夫

出来るだけ図や写真を多く使用して分かりやすく伝えようと思いました。

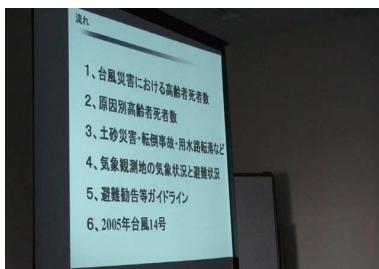
### 伝えたかったこと

台風災害で高齢者が被害を受けやすい理由は高齢者の暮らしにあるということ。そして、被害を少なくするためには今の避難方法よりもっと早い情報の提示が必要であり、具体的な避難方法を考えることが必要であることです。

### 発表の感想

テーマを絞りきれなかったということが一番の反省点です。また、更に説明も不十分で分かりやすく説明が出来なかったと思います。「自分の言いたいこと」が発表を通して一貫していなかったのも、参加者も分かりにくそうな様子でした。

しかし、アメリカで台風リタなどが接近しているということもあり、質問などが活発で反応は良かったように思います。避難の先進的な取り組み事例ももっと捜さなくてはいけないと思いました。今後、高齢者はますます増えてきます。高齢者がもっと安心して安全に暮らせるようなまちづくり、システム作りが必要だと改めて感じました。



## フォーラムの成果

第三回防災ユースフォーラムは30名弱の参加となり、ほぼ第二回ユースフォーラムと同じ規模になりました。ユース全員が喋れる関係、全員と顔の見える関係を作ることが出来たと思います。そういった関係を作ることが出来るのがユースフォーラムの有意義なところと感じています。お互いに顔の見える関係が作れるからこそ、話せる事があります。防災と言うキーワードに集まったユースだからこそ分かり合える日ごろの想いや団体での悩みがあります。そんな想いや悩みを言い合える場の必要性を感じました。また、今回は参加者の約半分が新たなメンバーと、とても新規ユースが多かった事が特徴です。ユースフォーラムでの新しい成果と言ってもよいでしょう。

今回はこれまでのユースフォーラムとは違う点があります。それは、フォーラムを「テーマ型」にしたということです。テーマ型にすることで、今回のユースフォーラムでは何を学んだのか、何が成果だったのかということを確認にしました。テーマは「福祉と防災」です。近年の度重なる災害で特に言われている災害時要援護者の問題。その中でも保健医療福祉的な援護を必要としている人々を対象としました。

一つ目のセッションの「病院と防災」では、これまでの地震災害において病院がどのような対応をしていたのかを学びました。普段、病院における防災の取り組み状況を知る機会ほとんどありません。そういった意味ではあまり知らなかった領域での知識を知る事が出来たのではないのでしょうか。また、災害時要援護者の多くを占める高齢者や障害者の生活のしづらさを「高齢者・障害者疑似体験」で実際に体感しました。体験器具をつけて歩行やスロープを歩く、エレベーターに乗るだけでなく、実際に食事もし、買い物にもいきました。高齢者・障害者の生活のしづらさを理解する一方、では彼らに対してどういった支援が必要なのかということを考える機会となったと思います。初めて体験器具をつけるユースも多く、とても有意義であったと感じます。「台風災害と高齢者」では、昨年度の台風災害から高齢者の生活実態を考えながら、どうして台風災害で多くの高齢者が亡くなるのかということを見ていきました。

これらのセッションを通して、すべての場面とは言えませんが、こういった場面で防災と福祉が関係していかなくてはならないか、またその場面でもういった支援が必要となるかを学ぶ事ができました。そういった意味では、防災の分野での福祉との関わりと、災害時における支援での福祉の関わり両

方とを学べたのではないかと思います。

最後になりますが、今回のユースフォーラムではこれまで防災に興味関心があまりなかった福祉系学部のユースも少数ですが参加していました。そのユースが福祉の分野においても防災が重要である事を知り、そしてユースフォーラムに参加したユースが福祉の重要性を知りました。今回のフォーラムを行い、参加したユースの中では福祉と防災の領域が少し近づいたのではないかと感じています。日常の生活を考える福祉、非日常の生活を考える防災が協働することの大切さをこのフォーラムで改めて考えさせられたと思います。



第三回防災ユースフォーラム

発行日 2006年9月 / 編集 第三回防災ユースフォーラム実行委員会

URL <http://www.bousai-youth.net>